

肉用牛繁殖経営の定着化に関する調査研究

第4報 会津地域における肉用牛繁殖経営の定着条件

阿部 和生夫

(福島県畜産試験場沼尻支場)

Research on the Establishment of Breeding Cattle

4. About conditions establishment of breeding cattle in Aizu area, Fukushima Prefecture
Wakio ABE.

(Numajiri Branch, Fukushima Prefectural Animal Husbandry Experiment Station)

1 はじめに

会津地域(南会津郡除く)について、さきに第2報でアンケート調査により肉用牛繁殖経営の実態とその動向について結果を報告した。

今回、この地域での現状維持農家及び規模拡大希望農家について現地調査を実施した。そしてその成果をもとにさきに実施したアンケート調査結果や各種関連資料を参考にしながら繁殖経営の定着条件について分析したので報告する。

2 調査方法と対象

(1) 調査方法

1) 農業センサス結果並びに福島農林水産統計年報等各種関係資料からの分析

2) 前回調査した実態と動向(アンケート)についての資料からの分析、会津地域19市町村を耕地率により4グループに区分10%以下7町村、10~20%5市町村24~40%2市村41%以上5町村頭数規模区分1頭、2頭、3~4頭、5頭~

3) 現地調査(14農家)

(2) 現地調査期間 平成2年4月(実績平成元年度)

(3) 調査対象 会津地域(南会津郡を除く)一円

3 調査結果

(1) 調査地域の位置

会津地域(南会津郡を除く)は図1で示すとおり本県の



図1 福島県における会津地域の位置

西部に位置し、いわゆる会津盆地と云われており21市町村からなっており総面積は県土の約21.8%を占めその74.1%が森林、耕地は12.2%と県平均の14%より少ない。

気象条件は典型的な内陸性気候で四季の変化に富んでいるが冬の寒さは厳しく全域が豪雪地帯となっている。

(2) 会津地域における個別農産物粗生産額順位

米どころ会津では第1位はいずれの耕地率区分でも米となっている。1983年では耕地率区分の4区(10%以下、10~20%、21~40%、41%以上)でいずれも葉たばこが第5位以内に入っているが、6年後の1989年では耕地率10%以下だけとなっている。肉用牛では耕地率10%以下で第4位と順位に変化はないが、その他の階層ではいずれも上回り耕地率21~41%、41%以上では米について第2位となっている。子とり用めすの占める頭数割合は耕地率10%以下で多くなっているが、耕地率が高くなるにしたがって肉用種肥育の割合が60~70%を占めている。

(3) 耕地率区分による肉用牛繁殖頭数及び1戸当り農用地面積

1) 耕地率と飼養頭数

21市町村のうちアンケート調査時点(昭和63年)で繁殖牛のいない2町村を除き耕地率区分により19市町村を区分分析した。

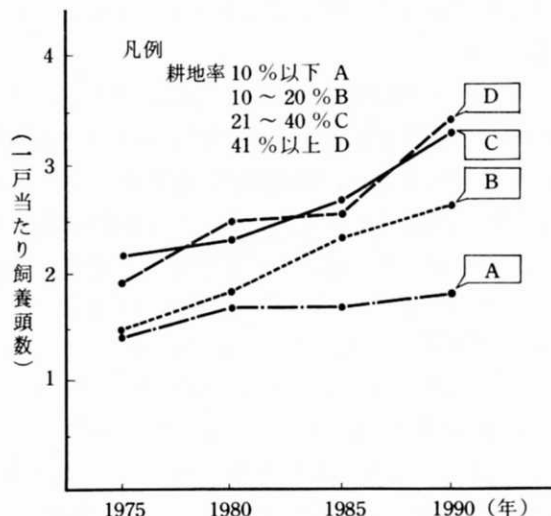


図2 耕地率区分による1戸当たり子とり用めす牛飼養頭数の推移
資料: 農業センサスより作成

耕地率が高くなるにしたがって1戸当りの頭数並びに頭数規模5頭階層以上でその割合が高くなる傾向を示している。(図2)

2) 1戸当りの農用地面積

耕地率が高くなるにしたがって水田面積は多くなっているが、耕地率10%以上で以下の倍程度200aを上回っている。転作田、普通畑を加えると耕地率10%以上で300aを上回り階層的には10~20%で多くなっている。

また、頭数規模別による1戸当りの農用地面積では3~4頭階層以上で水田面積200aを上回り、転作田、普通畑を合わせると300a以上となっている。

3) 子とり用めす牛の飼養戸数割合

子とり用めす牛の飼養戸数割合は年々減少傾向を示しており全体平均では1990年約3%で表1に示したとおりである。これを耕地率区分でみると全体平均より下回っているのは10~20%, 41%以上階層である。

表1 耕地率区分による総農家に占める
子とり用めす牛の飼養戸数割合 (単位: %)

耕地率	市町村数	年次			
		1975年	1980年	1985年	1990年
10%以下	7	7.4	6.2	4.8	5.0
10~20%	5	4.1	2.8	2.6	2.5
21~40%	2	5.7	5.9	5.9	5.0
41%以上	5	2.5	2.2	5.4	2.1
全体(平均)	19	4.8	3.9	3.6	3.3

資料: 農業センサスより

(4) 肉用牛繁殖牛飼養農家での経営主年齢と後継者年齢
経営主年齢を耕地率区分でみると各階層共に51~60歳でその割合が一番多く全体では30%を上回っている。61歳以上で約20%となっている。

後継者の年齢階層では20歳以下で耕地率区分で約30%近くを占める階層もあるが、全体としては約18%、しかし、これはアンケート回答者の期待数値としか思われない。頭数規模別についても20才以下では同じことが云いえると思う。全体的に後継者なしが7%, また、回答不明の20%も気になるところである。

(5) 現地調査について

現地調査では耕地率の4区分にまたがるように増頭希望農家6戸、現状維持農家8戸の14戸について調査した。増頭理由としては転作田の活用に粗飼料確保が可能、家族労働力の有効利用、住居周辺に敷地なく離れたところでも簡易牛舎づくり規模拡大を希望、これに対し

現状維持では飼養管理者の高齢化、住居の周辺に敷地なし規模拡大は出来ないなどである。増頭は現状より2~3頭増である。農家の経営主と実際牛を管理している人が必ずしも同一人でなく増頭希望では平均8歳、現状維持では9歳経営主より高年齢になっている。

表2 耕地率区分からの今後の飼養動向

(単位: 戸・%)

耕地率区分	10%以下	10~20%	21~40%	40%以上	計
現状維持	96(67.1)	80(66.1)	45(59.2)	51(55.4)	272(63.0)
増頭したい	37(25.9)	23(19.0)	21(27.6)	31(33.7)	112(26.0)
減らしたい	—	3(2.5)	2(2.6)	1(1.1)	6(1.4)
やめたい	6(4.2)	9(7.4)	3(3.9)	1(1.1)	19(4.4)
不明	4(2.8)	6(5.0)	5(6.7)	8(8.7)	23(5.2)
計	143(100.0)	121(100.0)	76(100.0)	92(100.0)	432(100.0)

注: 昭和63年アンケート調査による。

(6) 今後の飼養動向について

耕地率の低い地域で現状維持割合が高くアンケート調査戸数432戸の63%となっている。増頭希望は112戸と26%で耕地率区分の多く階層で意欲がみられる。減らしたいは全体で6戸の1.4%、止めたいは19戸の4.4%となっている(表2)。

これを頭数規模からみると、規模の小さい農家で現状維持割合が高くなっており、増頭希望割合は低い傾向にある。

止めたいは1頭規模で多く止めたい全体19戸のうち13戸で過半数を占めている。

(7) 考察

会津地域は耕地率の高い水田を中心として平坦部と耕地率の低い山間部に区分される。現状維持農家は耕地率の低い山間部で多くみられる。現状維持農家では実際に牛を管理する年齢は増頭希望農家に比較して高齢化している。

会津地域では集落が街道に面し密集しているところが多く高齢化に加え、規模拡大をするにも牛舎建設の場がなく離れた場所に牛舎建設してまで規模拡大するという意欲はない、これに比較して増頭希望農家では住宅から離れたところでも簡易牛舎を建設して規模拡大したいとしている。また、増頭希望農家では転作田を活用すれば粗飼料確保は可能、家族労働力を有効に活用したいとしている。

現在、会津地域において肉用繁殖牛飼養農家は約600戸、頭数1,700頭前後である。総農家に対し飼養割合は約3.3%、このうち約50%の農家は現状維持農家である。

後継者不足や兼業化の進むなかで直接牛飼いにタッチしている高齢者が健康であるかぎり水田を中心とした複合経営のなかで肉用繁殖牛は飼養され、今後、多少の中止や減少農家が出現したとしても頭数的には現状維持か、多少の増頭傾向がみられるのではないと思われる。